

資質・能力の育成を目指した 独自の教育課程を全校体制で開発

新潟県 上越市立大手町小学校

文部科学省の研究指定校である上越市立大手町小学校は、6つの資質・能力の育成を目指して、従来の教科を大きく見直し、教育活動を「生活・総合」を中心とする6領域に再編した教育課程を開発した。ここでは、同校での教育課程の編成プロセスや実践内容を見ていく中で、次期学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントのあり方を考えていきたい。



◎ 1873(明治6)年開校。学校は新潟県西南部、上越市の高田城址の近くに位置し、地域は雁木造の街並みや日本三大夜桜の桜並木でも有名。

校長 笠原 正先生

児童数 315人

学級数 14学級(うち特別支援学級2)

電話 025-524-6160

URL <http://www.ohtemachi.jorner.ed.jp/>

カリキュラム編成の考え方

6つの資質・能力を 6領域のカリキュラムで育成

上越市立大手町小学校は、1977年に文部省(当時)から研究指定を受けて以降、生活科、「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)、さらにそれらを中心に据えた教育課程の研究に取り組んできた。5回目の指定(2012~16年度)となる現在の研究テーマは、「真の〈自立〉と〈共生〉を目指す教育課程の創造」だ。

今回の指定を受けるにあたり、同校は教育課程を枠組みから見直した。まず、育てたい資質・能力を「探究力」「情報活用力」「コミュニケーション力」「創造性」「自律性」「共生的な態度」の6つに整理。それらの育成のために、各教科の学習内容を大きく6つの「領域」に再編した。

まず、それまでの研究から、生活科や総合学習に各教科を関連づけて指導すると、子どもの学びが深まることが分かっていたため、「生活・総合」

を中核に据えた。その上で、算数・理科は「数理」、国語や外国語活動は「ことば」、音楽、図工、家庭科は「創造・表現」、体育は「健康」に再編。さらに、「共生的な態度」を育む「ふれあい」の領域を置いた(P.6図1)。

2015年度は、資質・能力の中でも「探究力」の発揮に重点を置き、意欲や主体性、計画実行力などを促す活動に力を入れた。研究主任の朝井宜人先生はその意図をこう語る。

「子どもが探究力を発揮して問題解決に向かう学習が成立すると、ほかの資質・能力も触発されて学習内容が深まりやすくなり、各領域の本質に迫ることができます」

4年生の活動例を通して、子どもが学びに向かう姿を見ていこう。4年生は、「生活・総合」で1年かけて近隣の青田川に関する探究的な学習に取り組む。これに関連づけ、「数理」の「長さ」の単元では、「青田川の長さを測る」という課題を設定した。

「子どもたちは『生活・総合』の学習を通して青田川への関心が高まっ



校長

笠原 正

かさはら・ただし

モットーは、「本校の『子ども中心主義』を貫く教育風土の継承を使命と自覚して教育活動を進める」



教頭

藤本高雄

ふじもと・たかお

教諭・主幹教諭としても大手町小学校に勤務。その際、同校の子ども観、教育観に魅了された。



教諭

朝井宜人

あさい・よしと

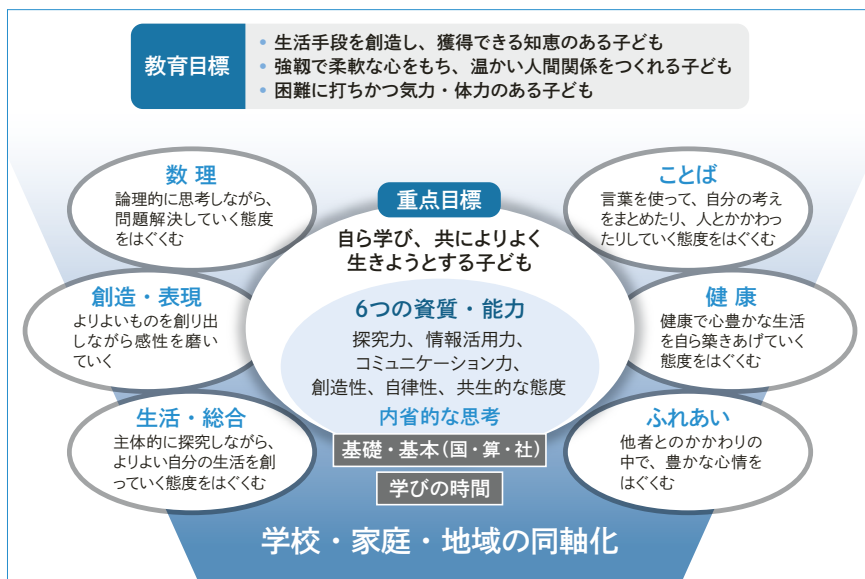
研究主任。学校・地域・保護者が一体となって子どもを育む大手町小学校の教育課程の大ファンでもある。

ているため、『どうすれば川の長さを測れるか』と問いかけると、『方法を考えてみよう』など、主体的に取り組み始めました」(朝井先生)

この活動では、まずグループや学級で話し合い、「1分間に約70m歩ける」という単位を基に測ることが決まった。そして、「15分間で歩いた距離は地図上で2cm」ということを調べ、地図上の川の長さを糸で測って、実際の川の長さを導き出した。

「探究力や情報活用力、コミュニケーション力といった資質・能力を発揮しながら、単元のねらいである

図1 大手町小学校グランドデザイン「6領域+学びの時間」による教育課程



*大手町小学校提供資料を基に編集部で作成

単位量や関数の考え方を身につけて
いきました」(朝井先生)

さらに、「ことば」の領域では、一連の青田川の活動で感じたことを基にグループで連詩を創作する活動を行い、単元のねらいである言葉の働きや表現技法などの学びを深めた。

それらの学びの基盤となるのが、「ふれあい」の領域で育まれる「共生的な態度」だ。これは、人間関係形成力や協調性などで構成され、遠足やマーチングバンドなどの体験活動の前後に、友だちとのかかわりを振り返る言語活動を通して育んでいる。

教科との関連と学びを深める工夫

毎日学んだことを振り返り、 内省的な思考を促す

同校の教育課程は活動中心であることが大きな特徴だが、すべての単元でダイナミックな活動や展開をしているわけではない。領域によっては、内容に応じて教科書教材を用いた授業を行っている。

また、6領域のほかに、漢字や計算の習熟などを行う「基礎・基本の時間」を設けている。社会科の内容

は基本的に「生活・総合」で扱うが、6年生の歴史分野は活動に関連づけるのが難しかったため、「基礎・基本の時間」に組み込んだ。なお、研究指定を活用して柔軟なカリキュラム編成を行い、図工や家庭科などの実技教科では内容の精選も行っている。

さらに、子ども自身が6領域の学びを関連づけて捉えられるよう、毎日の帰りの会に行う「学びの時間」で、その日の学習内容を振り返って文章化する。1～3年生は連絡帳に記入して、担任が共感や助言、励ましの言葉を書いて保護者とも共有。この積み重ねにより、子どもは自分の言葉で書き表す喜び、伝える楽しさ、学びを振り返る面白さを感じ取っていく。4～6年生は、貼ったりはがしたりできる「学びのシール」に気づきを書きためていき、1か月ごとに読み返して整理し、身についたこと、気づいたこと、今後学びたいことなどを文章にまとめる。

「各領域の学びを見つめ直し、意味づけや関連づけをして、学びを広げたり深めたりしています。この振り返りを通して、子どもたちは内省的

な思考を深めていきます」(朝井先生)

校内組織体制

全校を挙げて組織的に カリキュラムを編成

資質・能力の育成と各教科の学習内容を一体化させた活動を行うためには、教員にカリキュラムを構想する力が重要となる。藤本高雄教頭は次のように説明する。

「教員には経験の差があり、1人で活動を構想するには限界があります。そこで、各自が力をつける努力をするとともに、カリキュラム・マネジメントを組織的に進めています」

同校では、全教員が「単元・活動」「年間カリキュラム」「6年間の教育課程」の3つの部会のいずれかに所属し、全校体制でカリキュラム・マネジメントを進めている。

「単元・活動部」では、日々の子どもの見取りと授業改善の方法の開発を行う。どんな姿が見られた時にどの資質・能力が発揮されたのかを明確にして、探究を促す対象や学習過程を検討し、事例を蓄積する。

「年間カリキュラム部」は、年間カリキュラム作成の中心を担う。各領域で育みたい6つの資質・能力の指標を低・中・高学年ごとに示し、学習内容や活動を検討して、「カリキュラムベース」を作成する(図2)。

「『カリキュラムベース』を基に、4月に教員がアイデアを出し合い、年間のカリキュラムを検討します。この段階でいかによい案を出せるかが重要になります」(藤本教頭)

そして、上越市共通のフォーマットを用いて、6領域ごとに1年間の単元・活動の流れを示した「視覚的カリキュラム」を全学年分作成する。さらに、1年間を5期(4～5月、6～7月、9～10月、11～12月、1～3月)に分けて、各期末に全教員

による振り返り検討会を実施。ここで出た内容を基に、必要に応じて次期の活動内容の変更や調整を行う。

「子どもの反応などを見た上で、年度の途中でカリキュラムをガラリと変えることも珍しくありません。そうしてPDCAサイクルを回すことが、カリキュラム・マネジメントであると捉えています」(朝井先生)

「6年間の教育課程部」では、学期ごとに教育活動の自己評価を行うほか、児童・保護者へのアンケート(年2回)に、地域住民や外部の有識者、さらに授業公開での参加者からの意見も加えて、改善点を見いだす。

さらに、日々の実践を共有して継続的な改善を進めるために、管理職と研究主任、各学年1人が参加する「研究推進委員会」を毎週開催している。

「研究推進委員会は、各学年の担任が提案する活動のアイデアに対して助言したり、共に検討したりして、資質・能力をより引き出せる活動を一緒に探っていきます」(朝井先生)

成果と課題

資質・能力の高まりとともに教科学習内容の定着も進む

教員は、子どもの姿から資質・能力の高まりを感じ取っている。

「活動中は、夢中になって対象に向き合い、自分から考えて、友だちと一緒に進めようとする姿が見られます。その積極的な姿勢には、他校の先生も驚かれます」(朝井先生)

文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果も良好で、資質・能力とともに、教科学習の内容も定着していることがうかがえる。

「子どもの姿から、カリキュラム構築力や子どもへの理解力など、教員の成長も感じます。その背景には、教師は子どもの『やりたい!』を引き出す存在、という教師観が伝統的

図2 カリキュラムベースの例(「生活・総合」)

領域:生活・総合	領域の目標	主体的に探究しながら、よりよい生活を創っていく態度をはぐくむ		
		低学年 1・2年	中学年 3・4年	高学年 5・6年
問題活用 ◎得意な問題や得意な問題を、考えを整理して活用する。	・自分の思いや思いの整理に向けて、得意な問題や得意な問題を、考えを整理して活用する。	・自分の得意な問題や得意な問題を、得意な方法で考えを整理して活用する。	・得意な問題や得意な問題を、得意な方法で考えを整理して活用する。	・得意な問題や得意な問題を、得意な方法で考えを整理して活用する。
情報活用 ◎得意な情報や得意な情報を、考えを整理して活用する。	・知りたい情報を身近な人に聞いたり、本などで調べたりする。	・目的に応じて情報の集め方を工夫したり、情報を分類・整理したりする。	・自分の考えを、これまでの経験や獲得してきた知識と結び付けて整理する。	
コミュニケーション ◎得意な考えや得意な考えを、相手に伝えたり、相手の考えを聞いたりする。	・進んで自分の考えを話したり、知りたいことや分からないことを尋ねたりする。	・相手の考えや状況を考え、自分の考えを分かりやすく伝えたり、相手の話を聴いたりする。	・目的意識をもち、相手や状況に応じて自分の考えを分かりやすく伝えたり、相手の話を聴いたりする。	
創造性 ◎得意なアイデアや得意なアイデアを、表現したりする。	・自分の発想を生かして、表現する。	・体験からの気付きや思いを生かして、表現する。	・体験を感じ取った気付きや思いをもとに、自分の発想を生かして表現する。	
自律性 ◎自分で自分自身(得意)を調整したり、よいか。	・活動を通して、できるようになったことやよかったことから、自分への自信をもつ。	・自分の考えや行動を見つめ直そうとする。	・よりよい自分の生き方を見つめ直そうとする。	
共生的な態度 ◎得意な考えや得意な考えを、相手に伝えたり、相手の考えを聞いたりする。	・動物に仲良くかわりながら、友達と協力して活動する。	・相手の考えを認めたり、自分の考えに取り入れられたりしながら協力して課題を解決する。	・自然や地域、社会とかわりながら、そのよきよき問題点に気付き、進んで動きかける。	
	<これまで進めてきた学習対象> 1年・・・ヤギ、羊、アルパカ、ミニブタなどの動物の飼育、〇〇ランド作り 2年・・・野草の栽培活動、のらびび、「つくる」をテーマにした活動 3年・・・高田の朝市、水町商店街 4年・・・青田川(ゴミ問題、歴史、生き物、水質 等) 5年・・・食問題・食糧生産(いのち、食糧輸入、食糧、自給率、米作り、アイチモ産法、ニフトリ飼育、フタ飼育 等) 6年・・・ふるさとを想う活動(種、責任担当、調理スイーツ、ハス 等)			

*大手町小学校提供資料をそのまま掲載

図3 通知表での学習評価の例

観点	領域	期待する子どもの姿	評価
探究力	生活・総合	上級について調べたり、実際に和食を割ってみたりする活動を通して、上級をPRするための視点をもとに和食について考えている。	◎
	数理	実験や観察から疑問をもったり、もっと追究したい課題を自ら見付けたりして、進んで問題の解決を図ろうとする。	○
	ふれあい	なかよし班やスポフェス、実行委員の取組を通して、よりよい活動になるよう考え、自分なりの見通しをもって行動している。	△
情報活用	数理	医師の妥当性を話し合う中で、自分の意見と友達の見解を比べながら考える。	◎
	数理	対称な図形や数直線の関係を表す式について、既習事項と結び付けたり、筋立てて考えたりして課題を解決しようとしている。	○
	生活・総合	自分たちの考えた和食が上級をPRするものになっているかという視点で、自分たちや友達の和食について検討している。	△

*大手町小学校提供資料をそのまま掲載

にあるからだと思います」(藤本教頭)

また、保護者にも子どもの資質・能力の育ちが分かりやすく伝わるよう、通知表を資質・能力別に示すなどの工夫をして、同校の教育課程への理解を深めてもらっている(図3)。

「今年度で研究指定が終了するため、2017年度は領域から教科に戻し、学習指導要領に沿った教育課程に再編します。その中でも、能動的・協働的な学習を通して、子どもの資質・能力を育む教育課程の編成・実施に挑戦したいと思います」(藤本教頭)

その際にも、「生活・総合」「ふれあい」は継続し、今後も探究力の発

揮を促して各教科の本質に迫る教育活動を、同校のカリキュラムの軸にしたいと考えている。笠原正校長は、今後の展望を次のように語る。

「これまで本校が研究と実践を進めてきた汎用的な資質・能力の育成やカリキュラム・マネジメントは、次期学習指導要領の大きな柱として示されたことから、今後、同様の研究と実践が全国で進んでいくと考えられます。次年度以降、本校ではさらに研究と実践を深めるとともに、現状の課題を整理し、次期学習指導要領の先を見据えて、新たな研究に取り組みたいと考えています」